

**(はじめに)**

研究室の名前が非常に長いのに驚かれたと思いますが、これが正式の研究室の名称です。学部の養護教諭養成課程を基礎とした大学院修士課程の1研究室ということになります。養護教育専攻には現在6つの研究室があります。今回このコーナーを大阪地区で担当する事になり、代表幹事でもありますので、研究室というには程遠い研究単位ですが、紹介いたします。なぜ身体発達という名前がついたかと申しますと、本学の大学院では、現代的教育課題に関する自由選択科目というのがありまして、身体発達学特論もその1つです。それを私が担当しているということで、この名前になりました。本学は大講座制のため研究室のメンバーは、私と大学院生および学部学生で構成されています。現在大学院1回生に現職の養護教諭の先生がいます。この方は神戸市の中学校に勤務しながら研究を進めています。また4回生は7名います。

**(身体発達学とは)**

子ども達の健康課題を見ていきますと、身体発達に関するものが数多く認められます。WHOの憲章の中には変化する環境の中で調和して生きていく能力が必要であることが述べられていますが、現代の子ども達はその変化する環境に上手に適応することが出来ず、様々な問題を生じているのではないかと考えています。子ども達の発達に関わる様々な健康問題を探求し、解決策を提言できるような学と術にしたいと考えています。

具体的には肥満、痩せ、食生活習慣といったものを研究課題として取り上げています。やせ願望についてはずっと注目してきましたので、そろそろまとめなければと考えています。

**(研究室の歴史と近畿学校保健学会)**

当研究室のルーツをたどりますと、大阪学芸大学保健学科保健学教室にたどり着きます。この学科は昭和39年に設立されており、伊東祐一先生、富士貞吉先生、榊原栄一先生、目黒庸雄先生といったそう

そうたる先生方がおられ、教員養成というよりは健康に関するリベラルアーツを目指していたように思います。全員が医師で、医学博士でした。伊東先生は近畿学校保健学会の1回、2回および13回の年次学会長を務めておられます。また本学の養護教諭養成所の初代所長でもあります。4人の先生は全て鬼籍に入られましたが、私は大学院生そして助手時代に伊東先生から直接学会設立当時のお話をお聞きすることが出来ました。この経験は、50周年の記念誌編集に関わらせていただいた時にも役に立ちました。

これらの先生方に続く世代としては本学会の名誉会員である上林久雄先生、後藤英二先生、上延富久治先生がおられます。この先生方も近畿学校保健学会と深く関わっておられ、会長はもとより幹事長、事務局長、幹事といった要職に就かれました。50周年誌にも書きましたが、近畿地区の主要な先生方を紹介して下さったのもこれらの先生方です。私が直接お教えを受けました和歌山県立医科大学名誉教授の武田眞太郎先生をはじめとした近畿学校保健学会の先生方は、視野を広く持っておられたように思います。そして包容力があり、決して閉鎖的ではありませんでした。こういった風土を本学会は伝統的に持っていると思います。

**(養護教諭の養成と近畿学校保健学会)**

今年の学校保健法の改正では名称が学校保健安全法となり、養護教諭が学校保健活動の中心的な機能を果たすことが明確にされました。学校保健を看板としている学会として、教育現場の様々な健康課題に応えることが必要だと考えます。

そして養護教諭を養成する大学としては、いつも子ども達の健康生活を支え続けることが出来る「実践学」の構築が必要のように思います。

学会は研究討議の場ですが、子ども達の健康に関わる多くの人々が集いお互いに研鑽を積む場としてさらに発展してほしいと考えます。